

明日の保育に生きる研修について考える

— 2歳児クラスを対象としたビデオカンファレンスの事例から —

及川 留美・金 瑛珠・小野崎 佳代・西村 実穂

The Study of In-Service Training of Nursery for Nursery Practices to Utilize for Tomorrow:

A Case Study on Video Conference of 2 Years Old Child Class

Rumi Oikawa, Yonju Kim, Kayo Onozaki and Miho Nishimura

要 旨

平成29年に告示された保育所保育指針に保育の職場における研修のさらなる重要性が示された。このような流れを受け、H保育園では継続して研究者を含めた参加型園内研修を実施している。2017年度H保育園では「子どもの遊びを通して考える」というテーマのもと、計5回のビデオカンファレンスを中心とした園内研修が行われた。各研修においては担任保育者たちによってサブテーマが設けられ、それに合わせて研究者が保育実践を撮影した。撮影された映像の視聴をもとにグループ討議が行われ、その内容はワールド・カフェ方式によって参加者全員に共有された。

2歳児クラスの研修事例や研修後に行った研修参加者に対するアンケート結果から、2017年度に実施した園内研修が保育を振り返る契機となったこと、新たな気付きにより子ども理解が深まるなどの効果があったことが示唆された。一方で研修によって得られたことをその後の保育にどう活かすかというところまでは至っておらず、今後の研修のあり方としての課題が見いだされた。

キーワード：園内研修、保育所、ビデオカンファレンス、ワールド・カフェ

1. はじめに

平成29年度に告示された保育所保育指針では、第5章の3職員の研修等に「職場における研修」の項が加えられた。そこでは日々の保育実践を通じて保育の課題等の共通理解や協働性を高めること、日常的に職員同士が主体的に学び合う姿勢と環境の重要性が述べられている。

保育所は保育時間が長時間化していること、そのため保育者の勤務体制が多岐にわたることなど

の事情により園の保育者が一堂に会して園内研修を実施することが難しい。園内研修を行うという環境を整えることが難しい状況の中、公立H保育園では保育後の約1時間を利用して大学の研究者を交えた園内研修を実施してきた。園内研修は4年目を迎え、研修のスタイルは前年度の研修の反省をふまえ少しずつ変化してきた。本研究は2017年度にH保育園でおこなわれた研修事例をもとに、保育所における園内研修の意義とそのあり方およびそこでこの課題について考察を加えるものである。

2. 研修の概要

(1) 2016年度実施の研修について

H 保育園において2016年に行われた研修は、「子ども主体の保育について考える」というテーマにて実施された。0、1、2歳児の保育室での遊び、4、5歳児の園庭での遊びの様子を研究者が撮影し、その映像から10～15分程度の映像を本稿著者が抽出した。抽出した映像を園内研修で視聴し、参加者が意見交換を行った。研修時に出された意見や研修終了後に保育者に対して行ったアンケートの結果から、実践映像を活用した研修の利点は、状況性を詳細かつ具体的に、そして直接その状況に関わっていた当事者は客観的に見ることができる点にあると考えられた。また、研修という場において映像を共有し意見交換をすることによって、保育実践に関して共通理解を深める機会となったという意見も出された。一方、撮影時より研修における映像視聴までに期間が空いてしまい（1カ月～4カ月後に実施）、実践に関連する記憶が薄れてしまったこと、限られた研修時間の中で、映像は多くの情報を含むため焦点を絞りづらいといった意見が出された。これらのことから研修参加者の活発な意見交換を促すには、取り上げる映像に関して吟味が必要であるなどの課題も見出された⁽¹⁾。

(2) 2017年度の研修について

2017年度にH 保育園にて行った研修のメインテーマは「子どもの遊びを通して考える」であり、2016年度に行った研修と同様に保育実践を撮影した映像をもとにしたビデオカンファレンス⁽²⁾を行った（表1参照）。2016年度に実施した研修との違いは、研修にて取り上げた映像および意見交換の方法である。

表1にある【～】は担任保育者が決めたサブテーマである。このサブテーマは映像の撮影時に撮影者である本稿筆頭執筆者に伝達された。撮影した映像を基にした研修は、表1の日程からわか

るように映像撮影後1～3週間以内に実施された。また第1回～第4回の研修は、以下①～⑥の手順によって実施された。

- ①担任保育者より日々の保育における課題の説明
 - ・子どもの様子
 - ・課題
 - ・環境設定 等
- ②ビデオ視聴および付箋にコメントを記入しカテゴリーごとにグループの模造紙に貼る。
 - ・環境
 - ・保育者の援助・指導
 - ・育ちや学び 等
- ③各自のコメントをもとにしながらグループ討議
- ④各グループで出された意見をもとにしながら説明者、聞き手に分かれて意見交換。（ワールド・カフェ方式）
- ⑤担任保育者よりコメント
 - ・何を学んだのか
 - ・明日の保育へどう活かしたいか 等
- ⑥研修講師よりコメント（感想）

表1 2017年度研修の概要

日程	概要
2017.6.23	0歳児クラスの撮影 【子どもの視線の先にある物を見つめて】
2017.7.12	第1回研修 0歳児クラスの保育のビデオカンファレンス
2017.8.24	1歳児クラスの撮影 【子どもの言葉にならない思いをどう受け止めているか】
2017.8.30	第2回研修 1歳児クラスの保育のビデオカンファレンス
2017.9.25	2歳児クラスの撮影 【保育者や友だちと好きな遊びを楽しんでいるか】
2017.10.4	第3回研修 2歳児クラスの保育のビデオカンファレンス
2018.1.9	4、5歳児クラスの撮影 【自由な発想からの学びの展開と友達との関わり】
2018.1.17	第4回研修 4、5歳児の遊びのビデオカンファレンス
2018.2.7	第5回研修 園内研修のまとめ (4歳児事例の検討)

手順④にあるワールド・カフェ方式とは、少人数でのグループ対話（意見を出し合い、聴き合い、協同して話し合う）をメンバーの組み合わせを替えながら繰り返し、意見の発散・共有、視点の転換・統合を促していく対話の手法である⁽³⁾とし、近年研修などで用いられている。今回の研修においては、グループ討議の後、全員が各グループを回り、短時間ですべてのグループにおいて話し合った内容を聞くことができるように研修が構成された。

3. 研修事例

(1) 2歳児クラスのビデオカンファレンス

2017年度は計5回の研修が行われたが、本研究においては第3回の2歳児クラスの保育のビデオカンファレンスを事例としてとりあげ、考察をする。まずは研修において全員で視聴したビデオ映像についてその概略を示し、次に前述の手順②において各グループによって作成された模造紙より、主要な子どもの遊びに関する意見を映像視聴後の事例として示す。

映像事例1（室内遊び）

撮影時保育室にはウレタンマットが敷いてあり、自分の好きなおもちゃを選び遊べるコーナーやままごとコーナー、ウレタンの巧技台などさまざまなコーナーがあらかじめ設置されている。子どもたちは登園後好きな遊びを見つけ、思い思いに遊んでいる。¹

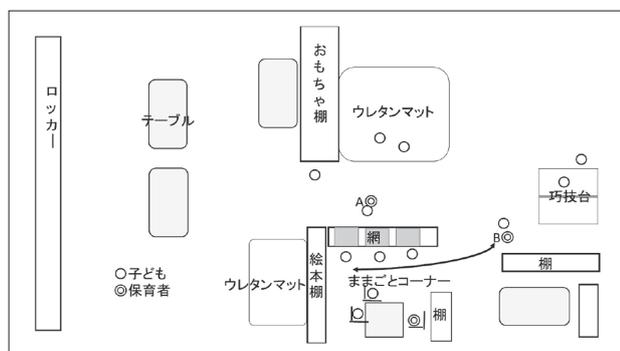


図1 映像事例1環境図

ままごとコーナー手前の棚の上には、保育者が

手作りをしたコンロが置いてあり調理用の網が載っている。女児3人がままごと用の野菜や果物などの食べ物を載せ、 Tongueでつまんでは裏返している。²保育者Aは登園後ぐずっている女児を膝に抱き、棚の向かい側から女児たちの遊びを見守っている。女児2名はしばらく食材を焼くと、ジッパー付きのビニール袋に入れ少し離れたところにいる保育者Bのところへそれを持っていく。³しばらくすると戻ってきて、また食材を焼き始める。

映像視聴後1

○環境

- ・ ままごとコーナーでは Tongue や焼き網があり、じっくりイメージを持って遊ぶ姿がある。⁴
- ・ 既製の食べ物（おもちゃ）ではなく、毛糸玉やいろいろな色、形の布などイメージの膨らむ素材があるとよい。⁵
- ・ ままごとコーナー、オープンキッチンが保育者と対面できて楽しそう。⁶
- ・ 広い部屋の使い方いろいろな工夫が感じられた。（難しさも感じた）

○保育者の援助・指導

- ・ ままごとコーナーに大人がいて、やりとりを楽しめたらよい。⁷
- ・ 抱っこされていた子が先生（A）の胸に顔を埋めていた→（先生が子どもを）他の子の遊びが見える向きにしていた。⁸
- ・ （Aが）キョロキョロして目目の前の子どもの遊びに集中していない。⁹

○子どもの育ちや学び

- ・ 大人のやることを見てうまくマネをしている。（料理）¹⁰
- ・ イメージしたものを身近なもので表現していた。
- ・ 友達と一緒にいるのが楽しい。

映像事例2（屋外遊び）

園庭の砂場近くのテーブルの上に水を汲んだタライが置いてある。ビニール袋に水を入れたり、

ペットボトルに水を汲んだりして2歳児の男児5名と3歳児2名がタライを取り囲むようにして遊んでいる。¹¹ 2歳児男児Tがビニール袋に入っている水をペットボトルに移そうとするが、ビニールの口が縛ってあるため水を移すことができない。保育者Cに「ここに入れるからあけて」と要求し、口をほどもらう。水をペットボトルに移そうとするが、すでにペットボトルには水がいっぱい入っており、ほとんどの水をこぼしてしまう。¹² 洋服が濡れ、少し気にしているようである。「ふた」と言って保育者Cからふたを受け取り、ふたを閉める。

タライの水が少なくなると保育者Cがホースから水を出し、タライに水を入れている。Tが手をだして、ホースから出てくる水をさわっていると、他児がタライにいれた砂がTの手に付き、「これやだ」と何度も手で払っている。「ねえ、これやだ」と離れている保育者Cに訴え「黒いやつやダ」と伝えると、Cはタライの水で洗うことをすすめる。「ここはまた黒くなっちゃう」と手を気にしてこすり合わせている。その間、保育者Cのところに数名がビニール袋を取りに来たりし、他の子どもの対応に追われ、Tは手をこすり続けている。¹³

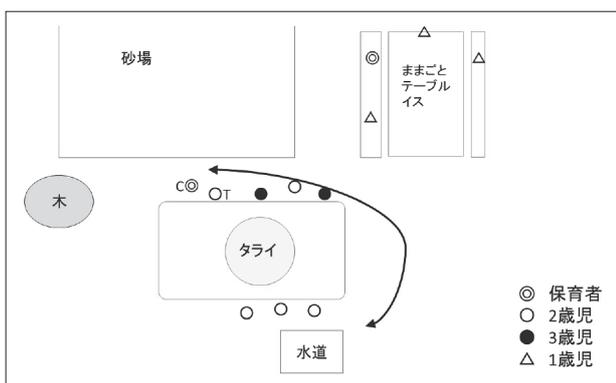


図2 映像事例2環境図

映像視聴後2

○環境

- ・ペットボトルやビニール袋、プラスチックコップなどいろいろなものがあって良かった。¹⁴

- ・タライはあえて机の上に設定していたのか。少し高いように感じた。
- ・ペットボトルに水を入れようとしていたが難しい。コップのように口の広い入れ物がよいかも。¹⁵

○保育者の援助・指導

- ・水遊びのコーナーにもう一人保育者がいれば子どもの要求にもっと応えられたのでは。¹⁶
- ・水の入ったビニール袋はどのように遊ばせたかったのか。¹⁷
- ・それぞれにやりたいことがある様子。何してる？ どうしたい？と聞いていけるとよいかも。

○子どもの育ちや学び

- ・ペットボトルやビニールの素材の使い方を2歳児なりに試している。¹⁸
- ・保育者にやって欲しいことを伝えられている。¹⁹
- ・子どもたちがやりたい遊びを見つけてよく遊んでいた。

(2) 研修事例の考察

2歳児クラスの研修のサブテーマは「友だちや保育者と好きな遊びを楽しんでいるか」である。ビデオ映像の撮影者でもある本稿筆頭執筆者は、子どもたちの遊びに焦点をあて撮影し、その中から事例映像1および事例映像2の計15分程度の映像を抽出し、カンファレンスに提供した。どちらの映像においても2歳児の子どもが自ら環境にかかわりながら遊びを楽しんでいる様子がわかる。

映像事例1の視聴では下線1に見られる保育室の状況が参加者に共有されることになる。下線2はままごとコーナーのそばで女児3人が遊んでいる様子であるが、その室内環境やそこで遊んでいる子どものとらえ方は参加者によって異なる。例えば下線4や下線10にあるように女児たちが道具を活用し遊びのイメージをもって遊び込めるととらえる保育者がいる一方、下線5にあるように現在の既製の食べ物（おもちゃ）ではイメージが広がらないとした意見もある。また、環境に

関しては、下線6のように保育者と子どもが対面できる環境が楽しそうにとらえる保育者がいると同時に下線7のようにコーナー内に保育者がいてそこで子どもとのやりとりをすることが良いとする意見もある。同じ状況における保育者の援助やかかわりについてもだっこする子どもの視点（下線8）からや遊んでいる子どもの立場（下線9）からなどとらえ方の違いにより、保育者の行為に対して異なる意見が出された。

映像事例2の視聴では、砂場付近で遊ぶ男児Tを中心とした遊びの状況（下線11）が参加者に共有される。下線12からは、Tが試行錯誤しながら道具を使って遊んでいる様子がかがえる。このようなTの様子から、下線18や下線19にあるように、普段2歳児と直接かかわることの少ない研修参加者が2歳児としての子どもの成長を改めて感じとっていることが読み取れる。また視聴している映像は皆同じであるが、その映像から環境に関して下線14にあるように良かったととらえる保育者がいる一方で、下線15のように不足していえるのとらえる保育者がいると同時に、下線17のようにその環境設定の意図に疑問を抱く保育者がいることがわかる。さらに下線13の状況については、保育者が子どもに対応しきれていない様子に関して、その状況における他の保育者の援助の可能性について述べていることがわかる（下線16）。

2歳児クラスのビデオカンファレンスの事例から、数分の子どもの遊びに関する保育実践の映像に対してさえ保育者の見方や考え方はそれぞれ異なることがわかる。このことは保育の実践が「このように環境を準備する。」あるいは「こう援助する。」といった既知の「知識」を単純にあてはめていくことで成立しているのではないということを示している。保育者は各々が目の前にいる子どもたちの様子や、その時に使用可能な物的環境および人的環境、進行している時間など複雑な状況の中にいながら次の行為を導きだし、実践しているのである。映像に関する各保育者の意見の相

違に見られたように意見の違いや価値観の衝突が起こりうる事態をその場にいる保育者が「とっさの判断」で切り抜けている⁽⁴⁾といえるだろう。

H保育園に在籍する保育者は短くても10年以上そして6割以上が20年以上の保育経験を持ち、全員の保育経験が一般的な園と比較して豊富である。保育実践において、経験を重ねるということは実践の際の行為の選択肢を増やすということにおいて有効であると考えられる。一方で、経験を重ねて保育実践に慣れるということは、人が日常生活において種々の行為を無意識に行っているのと同様に、保育者の保育行為も無意識に遂行されているということが指摘されている⁽⁵⁾。子どもの生活を中心とした保育という日常性に慣れてしまうことによって、行為の根拠となる判断の可能性について「考える」という意識が薄れてくるためであろうと考えられる。

H保育園における研修のビデオカンファレンスは、実践映像を客観的に見ることやそれに対する他者の意見に触れることを通して、子ども理解や保育の実践が様々な可能性に開かれていることを改めて実感させられる機会となっているととらえられるだろう。

4. 研修に関するアンケート

2017年度に実施したすべての研修終了後にH保育園の保育者に対して園内研修に関するアンケートを実施した。8つの質問項目に対し「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「やや当てはまらない」「まったく当てはまらない」の5つの選択肢にて回答をお願いした。全保育者の票数を合わせても17票と少ない数ではあるが「とても当てはまる」を5点とし、以下4、3、2、1として換算し平均点と標準偏差を求めた（表2）。全項目の平均値は4.75であり、4.8以上の項目に網掛けをした。

また、研修に関する感想について自由記述を求めたところ、記述は保育の振り返りに関すること、子ども理解や気付きに関すること、ディス

表2 選択式アンケート結果

(n=17)

	平均	標準偏差
日々の保育実践に役立った	4.70	0.45
子どもの理解が深まった	4.82	0.38
新しい気付きがあった	4.88	0.32
協働性が高まった	4.64	0.58
保育を振り返る機会となった	5.00	0
共通理解が深まった	4.58	0.49
自分の意見を言うことができた	4.77	0.49
今後の課題が見つかった	4.64	0.47

カッションに関することの3つに分類できた。主な記述内容は以下である。

自由記述式アンケート

○保育の振り返りに関して

- ・日々の忙しさに流されがちなので、保育を振り返る良い機会となった。²⁰
- ・他の保育者の話を聞いたり、保育を見たりして自分の保育を振り返ることができた。²¹

○子ども理解・気づきに関して

- ・他のクラスの保育の様子が理解できた。
- ・ビデオにより自分の視点ではなく客観的に子どもの姿を見ることができ、新しい姿が見られた。²²
- ・ビデオを見ることでなるほど思ったり、参考にしようと思ったりする発見が毎回あった。²³
- ・映像で見ると、注目していた子だけでなく、周りにいた子の行動、気持ちも見えてくる。²⁴
- ・子ども理解と共に、他の保育者（仲間）理解にもつながった。

○ディスカッション（ワールド・カフェ）に関して

- ・気をつかわずに自由に意見を言える場になったのが良かった。²⁵
- ・話し合いの時間に他者の見方・考え方に触れ、広がりを感じたと感じている。
- ・職員で子どもの話をするのはとても大事で、意見交換をすることで共通認識ができたり共通理解が深まる。
- ・一人一人の見方、考え方が違うことを声に出し、ディスカッションすることは刺激となった。²⁶

選択式のアンケートの結果において高得点である子ども理解の深まりや新しい気付き、保育の振り返りについては、自由記述においても多くの保育者がその実感について記述をしていた。状況を離れて映像によって客観的に保育実践を見ることや他者の意見に触れることを通して、新しい子どもの姿を発見したり（下線22、下線24）、実践について新たな発見をしたり（下線23）と保育実践について振り返る（下線20、下線21）ことを通して保育実践について「考える」機会になったといえる。一方で選択式のアンケートの結果から研修に参加することによって保育を振り返りながらも、そこから保育実践の課題を見出し、日々の保育の実践に応用するところまでは至っていないことが推察された。

今回の研修においては、グループで討議した内容をワールド・カフェ形式にて参加者全員で共有した。この形式をとった研修においては、全員が情報の受け手であると同時に情報の発信者ともなる。このワールド・カフェにて研修を行うことの発案は副園長であり本園内研修の時間に合う形に應用し、保育について自分の言葉で「語る」ことの重要性を指摘していた。また、研修の場に限りなく保育者同士が保育について「語る」ことにつながればと考えていた。下線25や下線26からは、この研修が自分の意見を声に出し発信する機会となっていたことがうかがえる。また、保育について「語る」とは保育を言語化することでもあり、保育について「考える」ことなしには行えない。そしてグループでの検討内容について発信するということは、検討内容について振り返り「考える」ことにもつながっているといえる。2017年度にH保育園にて行われた研修は、単なる情報の受け手として参加するのではなく、主体として研修に参加し、保育について「考える」姿勢が求められていたといえるだろう。

5. まとめ

ドナルド・A・ショーンは、プロフェッショナル

の仕事生活について以下のように説明している⁽⁶⁾。

有能な実践者は、日々の実践の中で、適切な判断基準を言葉で説明できないまま、無数もの判断を行っており、規則や手続きの説明ができないまま、自分の技能を実演している。

保育者とは保育実践のプロフェッショナルであり、H 保育園の保育者は保育経験年数も長く有能な実践者である。保育実践は、実践の中にある保育者の無数の判断の中で行われているが、保育という日常性の中でそれを意識することが難しいということは、前述した通りである。2017 年度に H 保育園にて行われた園内研修は、第一に各々が持つ実践の中にある暗黙の判断基準を意識化する、第二に適切な判断基準は唯一のものではなく、そのため判断基準に基づく保育実践の可能性は無限に開かれていることに気付くという点において効果的なものであったと考えられる。

最後に、研修と保育の質の向上との関連について考えてみたい。2017 年に告示された保育所保育指針においては、職場における研修等の項に次のようにある。

職員が日々の保育実践を通じて、必要な知識及び技能の修得、維持及び向上を図るとともに、保育の課題等への共通理解や協働性を高め、保育所全体の質の向上を図っていくためには、日常的に主体的に学び合う姿勢と環境が重要であり、職場内での研修の充実が図られなければならない。(傍線筆者)

保育所保育指針に述べられているように保育実践における「保育の質」を向上するために、園内研修は位置づけられ、その充実が求められている。つまり研修にて得た省察や新たな気付きは、生活や遊びにおける子どもたちの豊かな経験を保障するため今後の実践に活かされなければならない。

本研究の事例やアンケートの結果からは、園内研修で得た知見と日々の保育実践との結びつきについては明らかにすることはできなかった。今後の課題は保育実践に結びつく研修をどのように構成するのかということを検討していくことであるといえる。

謝辞

研修に参加し、アンケートにご協力いただいた H 保育園の園長先生をはじめ、先生方に深く感謝申し上げます。

注

- (1) 及川留美・梶原里美・福崎淳子・小野崎佳代・西村実穂 2017 現場と大学との協働による園内研修の試みⅢ 実践映像の視聴を通じた研修をもとに東京未来大学研究紀要 第 12 号 pp.113-122
- (2) カンファレンスとは、実践現場についての記録をもとに、さまざまな立場の参加者が実践者自身の目で、そこで起こっている出来事を分析し、具体的な場面に即して実践のありかたを検討し、「よりよい実践」に向けての実践的知見を生み出そうとえうことをいう。佐伯胖・刑部育子・菊宿俊文 2018 『ビデオによるリフレクション入門—実践の多義創発性を拓く—』 東京大学出版 p.42
- (3) 尾之上高哉・石橋由紀子・岡村章司・小林祐子・宇野宏幸 2014 教員研修へのワールドカフェ導入の効果の検討 日本教育工学会論文誌 第 38 巻 1 号 pp.141-144
- (4) 前掲 (2) p.6
- (5) 小川は、例えば保育者が子どもにあいさつをするという日常生活習慣的行動は、半ば潜在意識されて行われているとしている。また保育者の習慣性はある種の慣習性（ここでは朝にあいさつをするという文化的慣習のこと）に支えられているため、その習慣性を変革するということは、持続的に新たな習慣性をつくりあげていく必要があるとしている。小川博久 2000 『保育援助論』 生活ジャーナル p.13-14, p.42
- (6) ドナルド・A・ショーン／柳沢昌一・三輪建二監訳 2007 『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』 鳳書房 p.50

参考文献

花岡折一郎・杉村伸一郎・林よし恵・松本信吾・久原有喜・日切慶子・落合さゆり・山本隆春 2011 森の

- 幼稚園カリキュラム作成に向けたビデオカンファレンスの試行 広島大学 学部・附属学校共同研究紀要 pp.165-170
- 中坪史典編著 2018 『保育を語り合う協働型園内研修のすすめ—組織の活性化と専門性の向上に向けて—』 中央法規
- 中坪史典編著 2018 『「協働型」園内研修をデザインする—保育者が育ち合うツールとしてのKJ法とTEM』 2018 ミネルヴァ書房
- (おいかわ るみ) 東京未来大学 こども心理学部
(きむ よんじゅ) 東京未来大学 こども心理学部
(おのざき かよ) 東京未来大学 非常勤講師
(にしむら みほ) 東京未来大学 こども心理学部